

研究報告

音楽に関する学際研究の広がりとは方法 三つのコロキウム報告を中心に
**INTERDISCIPLINARY METHODS AND DEVELOPMENT FOR MUSIC
 RESEARCH:
 A REPORT ON THREE COLLOQUIUMS IN FRANCE**

水野 みか子
 Mikako MIZUNO
 名古屋市立大学
 Nagoya City University

概要

パリで開催された三つのコロキウムやシンポジウムをとりあげ、音楽に関する学際研究の広がりとは方法について報告する。三つの事例は、①ソルボンヌ大学と Ircam が中心となって定期開催している *Collegium Musicae* の PhD/PD 研究報告会、②フランス国立図書館とラジオ局 フランス・ミュージックが主催する一般公開シリーズ「声がいっぱい！」における CNRS の研究紹介、③作曲家・理論家であるフランソワ・ニコラが主催する *Mamuphi & Entretemps* のシリーズ、である。

This paper reports three colloquiums in France. The first is *Collegium Musicae*, which is mainly supported by the musicological research group of Sorbonne University. The second, addressed to the general public, discusses human voice. The last is *Mamuphi & Entretemps*, which has been steered by François Nicolas.

1. COLLEGIUM MUSICAE

博士課程在学または修了の若手研究者によるコロキウムやコレージュ・ド・フランスでの講演会などを実施していく *Collegium Musicae* は、専門分野を超えた音楽学の包括的グループとして2年前に始まった組織 IReMus (Institut de Recherche en Musicologie) をはじめとする九つのグループによって運営されている。IReMus は、かつて電子音響音楽データベース (EMSAN database) を支えた「パリ・ソルボンヌ大学音楽学/フランス音楽保存 (OMP)」を含めて音楽学研究の複数機関を統合し、さらに、伝統あるフランス政府機関としての国立科学研究センター (CNRS) と国立図書館 (BnF) がバックアップする大きな研究組織であり、IReMus の総監督であるセシル・ダヴィ・リゴー女史は、IReMus

の研究成果としてすでにラモーのオペラの批評校訂報告を出版した。音楽学の研究分野が多角化するなか、このように超域的で、かつ、文化資源の保存・公開を共通目的としてフランス以外の研究も取り込み大組織にしてしまうというという動向は、やや帝国主義的ではあるものの、組織力の弱い日本の研究者にしてみれば、有益情報を探す窓口が一括化されるという利便性をもたらす。EMSAN database は JSSA も協力してきた研究であり、2016年10月のJSSA音楽祭で併催される EMSAN 研究会の予告は IReMus ホームページにも掲載されている。

Collegium Musicae を支える IReMus 以外の大学や機関や過去の研究会等については <http://collegium.musicae.sorbonne-universites.fr/> に記載されているが、全ての研究会記録が網羅されているわけではないので、ここでは2016年5月13日に Ircam の Salle Stravinskiy で開催された若手研究者の発表について報告する。発表者と発表題目を(表1)に示した。この一覧からもわかるように、IReMus 自体は音楽学的研究方法を保持しているものの、Ircam を軸として(ソルボンヌ側との連携ではなく)ピエール・マリー・キュリー大学との連携による博士研究は、技術探求や科学哲学への広がりを持っている。

たとえば今回のテーマの一つである「即興」について、オーネット・コールマンにおけるセリー技法の影響に関する研究発表 (Belghith) がある一方で、即興演奏中のアクシデントや演奏者の直感をどのように記譜するかについての研究 (Agnes Magalhaes) や、即興演奏中の「先読み」や「構築」を「メモリー」と「シナリオ」という概念でモデル化して MAX/Antescofo に組み込む研究 (Nika) などが発表された。

もう一つのテーマである「科学・技術との関連における音楽思考」のセクションでは、作品構成と電子音

表 1. *Collegium Musicae* (2016年5月13日)の研究発表者と発表題目

発表者氏名	発表題目	所属など
Alexandros Markeas	Musiques intuitives : aspects de l'oralité dans le champ de la création musicale contemporaine	招待講演。作曲家、CNSMD 教授
Zaher Belghith	Une étude esthétique et analytique de la forme dans le cadre de l'avènement du courant Free Jazz au début des années 1960	Doctorant, Université Paris-Sorbonne, IReMus
Michelle Agnes Magalhaes	Comment (ne pas) provoquer un accident ?	Post-doctorante, Ircam
Jérôme Nika	Guider / composer l'improvisation musicale homme-machine à l'aide de scénarios temporels	Doctorant, Université Pierre et Marie Curie, Ircam
Fabien Lévy	La musique, perdue entre irrationalité et logocentrisme	招待講演。作曲家、デトモルト音楽大学教授
Elsa Filipe	La relation du matériau compositionnel pour l'organisation formelle de l'œuvre mixte. Présentation de deux cas d'étude : Music for flute & ISPW de Cort Lippe et Partita I de Philippe Manoury	Doctorante, Université Paris-Sorbonne, IReMus
Julia Blondeau	Espaces compositionnels et temps multiples : de la relation forme/matériau	Doctorat de musique : recherche en composition de l'Université Paris-Sorbonne, l'Université Pierre et Marie Curie et l'Ircam
Daniele Ghisi	Interfaces réactives pour la composition assistée par ordinateur en temps réel	Doctorat de musique : recherche en composition de l'Université Paris-Sorbonne, l'Université Pierre et Marie Curie et l'Ircam

響の役割という見地からフィリップ・マヌリとコート・リッピによる《フルートと ISPW のための音楽》を分析し、ディレイ、トレモロの追従等の「音楽的機能」を明文化した極めて精度の高い研究 (Filipe) と並んで、複層的の時間を作曲空間に組み込むプログラムのための音楽思考に関する哲学的エスキス (Blondeau) や、カルロス・アゴン Carlos Agon の指導下で自らの作曲のために開発中のライブラリー<dada>によって<bach>以後をめざし、音楽の新しい概念を切り開く研究 (Ghisi) が発表された。

Collegium Musicae では、音楽学や作曲のみならず、器楽演奏を専門とする博士号候補者による優れた研究も発表されており、実技系学生の博士論文指導の点で日本にとって参考になる事項が多い。

2. 「声」をめぐる学際研究と研究成果の一般公開

フランス国立図書館フランソワ・ミッテラン (BnF) では、2016年1月から6月にかけて毎月1回のペースで、歴史家でCNRS 研究員のカルン・ル・バイユ Karine Le Bail がプロデュースしてフランス・ミュージックが高等教育機関との協働で進めている公開コロキウム、「声

がいっぱい！」シリーズが展開されている。このシリーズは図書館のオーディトリウムでの一般公開シンポジウムであり、事後にはフランス・ミュージックでラジオ放送し、さらに図書館のホームページに記録映像を掲載する、という形で徹底的に開かれた文化企画になっている。

その中で、シリーズ第四回 (4月5日) には、フィリップ・マヌリがシンポジウムに登場して、「声を変換する」をテーマに、Ircam での技術開発や20世紀の声の開拓などを話題にした。シンポジウムのパネラーについては (表2) を参照されたい。

オペラ・コミックの委嘱によって、2017年の初演に向けてマヌリが作曲中の作品は、オーストリアのノーベル文学賞作家エルフリーデ・イエリネク Elfriede Jelinek による、福島地震を題材にした《光無し》をテキストにしている。20世紀以降のオペラが参照すべき声と言葉の扱いとして、シンポジウム司会者からジョイスが指摘されるが、マヌリはむしろ、マデルナ、ベリオ、アペルギスといった先輩作曲家の作風への興味を示した。この回にはバリトン歌手リオネル・パントル Lionel Peintre が、アペルギスの《14のジャクタシオン》を歌った。

表 2. 公開シンポジウム「声がいっぱい！」(vol.4,5) パネラー一覧

	パネラー氏名	備考
第四回 4月5日 「声を変換する」	Philippe Manoury Julien Leroy Lionel Peintre Greg Beller	作曲家 指揮者 バリトン歌手 Ircam、アーティスト、情報処理研究者
第五回 5月17日 「声を響かせる」	Michaël Levinas Florent Derex Maxime Pascal Marie-Madeleine Mervant-Roux Joël Huthwohl	ピアニスト、作曲家 音響エンジニア、アンサンブル・ル・バルコン創設者の1人 アンサンブル・ル・バルコンの指揮者 CNRS 名誉研究員 BnF 舞台芸術部門ディレクター

「声を響かせる」をテーマとしたシリーズ第五回には、音楽家として、ル・バルコンのアンサンブルを率いる若手指揮者マキシム・パスカル Maxime Pascal とともに CNSMD（パリ国立高等音楽院）教授のミカエル・レヴィナスが登壇した。

この回のシンポジウム冒頭で行われた、CNRS 名誉研究員 マリー・マドレーヌ・メルヴァン・ルー Marie-Madeleine Mervant-Roux 女史による基調報告は、2015年からのプロジェクト ECHO の経過説明と事例紹介だった。ECHO は 1950 年から 2000 年までの劇場での「口頭表現」の始まりと展開を主題とする研究プロジェクトである。このプロジェクトは、演劇研究の分野がともするとテキスト研究や舞台の視覚要素の分析に偏りがちであったのを受けて、特にフランス演劇に焦点をあて、台詞の抑揚や劇場の音響効果、語られた言葉の「声」の側面等に着目して文化史を捉え直すことを目的としている。聞き、読み、記憶し、声に出し、歌う、という諸点から言語を考え歴史を記述する研究である。

メルヴァン・ルー女史が示した音源資料は、まず、演出のジャン・ヴィラルール Jean Vilar が 1956 年に語った「(広大な) シャイヨー宮の劇場建築に合わせて台詞に間を入れる」という趣旨の言質であり、続いて、1951年の国立民衆劇場 (TNP) でヴィラルールと俳優ジェラルド・フィリップ Gérard Philipe が《公子ホンブルグ》のセリフ回しの稽古をしている時の録音だった。女史はその稽古の中で繰り返される、「せりふを劇場に響かせる」ための道具の工夫や声の抑揚の議論、さらには作曲家モーリス・ジャール Maurice Jarre によるステレオ効果の提案等をとりあげ、音楽を作っていくように台詞まわしを構築していくために 1950 年代初頭に「声を響かせること」の技術と表現に関してどのような試行錯誤を繰り返したかを論じた。50 年代初頭、演劇でステレオフォニックを使用することが、水平次元での音の定位や対角線上での音の移動による新しい表現へとつながった。こうした観点から BnF に残されている

数々の視聴覚資料の新たな整理が可能になり、エコーやステレオ効果という主題を歴史記述の縦糸にするために演劇資料を読み直すことが必要だと説かれた。女史はまた、1952 年、53 年ころの劇場でのせりふやナレーション、そして音楽に関して、室内音響とマイクによる拡声や効果などの「聴取」の問題が顕在化してきたことを語った。

声の表現と室内音響やエコーやステレオフォニックによる効果については、まさにクルブ・デッセーでピエール・シェフェールが実践的に探求・教育してきたことであり、ルネ・クレールもオデオン座の演劇でエコーを考えていた。そのことに女史も言及し、ボーヌ (Beaune) のスタジオでシェフェールの元で辣腕をふるった録音技師ベルナルが、ラジオフォニックの表現や音響編集技術として実験研究したことを演劇に応用しようとヴィラルールに提案としたという事実がシンポジウムでも話題にのぼった。またステレオフォニックの演劇への応用と軌を一にして、ジェラルド・フィリップ主演の《ニュクレア》では劇場の音響効果として噪音や日常音の録音が使われたが、これに関しては、パネラーの 1 人、フロラン・ドゥル Florent Derex が、マイクを隠して観客に見えないようにして音響効果によって台詞に遠近感と詩的空間を加える工夫をした、と報告した。

ECO のプロジェクトは、演劇研究、リバーブルゾナンス/エコー等の音響処理の研究、劇場建築研究といった諸分野が全く独立している現在の日本にとって示唆的であり、これら分野の横断のために、文化資源としての視聴覚資料が改めて研究されている点が非常に興味深かった。

なお、ドメヌ・ミュージカルでの音のスペクトラルや電子音響音楽、アコースマティック音楽、ラジオフォニックなどの用語は、レヴィナスにしてみればいずれも古い昔話のように聞こえたのかもしれない。オペラ創作に積極的なレヴィナスは、むしろ、日常とは異なる音の定位によってオペラ危機からの回復を求め、現代

的視線を強調した。マキシム・パスカルはベルリオールの《幻想交響曲》をシンセサイザー入りのオーケストラで演奏するなどして話題になっているが、「鳴り響かせる」ためにエフェクターや電気音響上の変換を使う現代的な手法が、半世紀前の資料の音響解析から検証するというと同じ場で議論されるという事態は、人文学における科学的手法のモデル事例として示唆するところが大きいだろう。

この回には演奏実演ではなく BnF および ina のアーカイブ録音資料と音楽家の私的録音によって、モーリス・ジャールの《ロレンザッチョのファンファーレ》、ピエール・アンリの《カルダーのモビール》、レヴィナスの《鳥の集会》《メタモルフォーズ》、シャリーノの《ローエン格林》、フェルドマンの《会話と音楽》が再生された。シャリーノとフェルドマンはマキシム・パスカル指揮のアンサンブル・ル・バルコンの演奏録音である。

3. フランソワ・ニコラと MAMUPHI & ENTRETEMPS

1947 年生まれの作曲家・音楽理論家フランソワ・ニコラ François Nicolas は、1980 年代にカーゲルやミシェル・フィリポの影響を受けて現代音楽の世界に入り、1990 年代には雑誌編集やフランス・ミュージックのプロデューサーとして活躍した後、Ircam の物理モデルによる音響合成チームのメンバーとなった。さらに *Revue de musicologie* の編集に携わり、自らもバラケ、ドナトニ、シュトックハウゼン、ウェーベルン、クセナキスらに関する理論的論文を発表した。このころから理論家として、音楽学でも作曲でもない独特の枠組みで多数の分析書や理論書も出版している。1997 年に Ircam でニコラが創設したコロキウム *Entretemps* は公開書評や音楽家へのインタビューを中心に作曲家論や作品分析を主としていた。90 年代末から 2000 年代に入ること、*Les cahiers de l'Ircam* シリーズをはじめ Ircam によって多くの理論書、作家研究書が出版されていたが、ニコラもシェーンベルクやファニホウについての論考を発表し、それが拡大した形で *Entretemps* のダイアログも継続された。ニコラの著書《シェーンベルクの特異性》に関してかつて筆者は《音楽学》誌上で論じたが、日本でニコラの思想はあまり話題に上っていない。

現在のニコラのコロキウムは、従来の *Entretemps* に加え、言語や詩との関わりに重点を置く *Babel*、数学や哲学への視野を持つ *Mamuphi* の三本立てになっている。2015 年から 2016 年にかけてのシーズンではこの三つが、独立した企画 6 回と三つを合同した企画 1 回の全七企画となっていた。

2016 年 4 月 8 日、9 日の合同コロキウムでは、2014 年に出版されたニコラの 4 巻本の理論書《Le monde-

Musique》を議論の共通基盤として、そこでの理論展開に対する種々専門分野からの問題が提起された。直訳すれば《「音楽」世界》となるこの四巻本は、I. 音楽作品と聴取、II. 「音楽」世界とソルフェージュ、III. 音楽家とその音楽知性、IV. 「音楽」世界の理性、という構成を取る。ソルフェージュや演奏実践といった音楽教理を哲学、数学、人類学、音楽学など複数の視点から考察する浩瀚な著述であり、そのほとんどをニコラ本人の思考として語っているため、ここに示される思想は、ニコラ自身が名付けたコロキウムのタイトル *Mamuphi* (mathématique+musique+philosophie) をもじって Nicophie というあだ名で呼ばれるほどに独自の構築を持っており、ニコラ自身の 30 年に渡る作曲経験に裏付けられた音楽論考となっている。ニコラ自身の言葉を借りれば、「それ以上分つことのできない「個人」の持つ精神空間として音楽知性を考え、エクリチュールやソルフェージュといった実践レベルから最も抽象的な哲学記述のレベルまでの中間にある様々な知性を<音楽する心>として論じる」ことが四巻本シリーズの目的である。なお今回のコロキウムの発表者名を(表 3)に示すが、これらプレゼンテーションは全て動画としてネット上で見ることができる。またシリーズ本の概要や過去のコロキウムの記録などは <http://www.entretemps.asso.fr/Nicolas> に詳細が提示されている。

表 3. *Mamuphi* (2016 年 4 月 8 日、9 日) の発表者

講演者氏名	専門分野など
Violaine Anger	音楽学
Andrea Cavazzini	哲学
Antoine Bonnet	作曲
Mathias Béjean & Andrée Ehresmann	数学
Mathew Lorenzon	音楽学
David-Emmanuel Mendes-Sargo	人類学
Frederico Lyra	音楽家
Éric Brunier	美術評論
Gianfranco Vinay	音楽学
Ivan Segré	哲学
Hacène Larbi	作曲・指揮
François Dacht	心理分析

政治、歴史、建築、映画、音楽学、神学、人類学、数学などの広範な知を扱いながら音楽という現象に取り組むニコラの思考は、*Entretemp* の共同オーガナイザーであるアンドリレア・カヴァツィーニ Andrea Cavazzini が指摘するように、アドルノの全体性システムに匹敵する大きな野心であり、ダヴィド・エマヌエル・メンデス=サルゴ David -Emmanuel Mendes-Sargo の言うように「地獄の問題」に取り組むことではあるが、見方を変えれば、異分野の思考枠を横断するメタファーのよ

うにも読める。そして、メタファーは言葉の置き換え、あるいは、音楽以外の分野で専門概念・用語が確立している場合にそれと同じことをニコラがなんと呼ぶか、という問題になるのではないかと提起したのは数学者であるマティアス・ベジヤンとアンドレ・エールマン Mathias Béjean & Andrée Ehresmann だった。彼らは、人間が記憶するときの精神メカニズムにおいて、瞬間が積み重なってある状態を作ったときに「システム」と呼んでいるが、それと似たことをニコラが考えているとすれば、ニコラの特異概念である、音楽知における「景色 *paysage*」は別の用語で説明が可能かもしれない、と指摘している。

異分野間で学際交流する場合に用語の問題は学術論理の枠組みと連動して常に問題視されてきたわけだが、音楽学プロパーの研究者からも興味深い発表がなされた。トリノのジュゼッペ・ヴェルディ音楽院で長く音楽学研究を行ったのちにパリ第8大学教授となり Ircam/CNRS の博士論文の指導をしているジャンフランコ・ヴィニヤイ Gianfranco Vinay は、ダールハウスと哲学者たちが研究手法について議論を収束させなかったという経験談を引き合いに出し、「フランソワ・ニコラの『音楽』世界」と今日の音楽学：両者の間に対話は可能か? というタイトルで語った。ヴィニヤイは、音楽学者がアドルノをあまり積極的に研究してこなかったのと同様にフランスの音楽学者はニコラの議論にほとんど関わりを持ってこなかったという事実を強調し、音楽学の国際大会が各地で開催される昨今でも世界に共通する学問方法が有るわけではなく、各国で異なる論点や概念を持ってよいのではないかと主張した。歴史資料に関わる音楽学、理論分析に関わる音楽学、音符の中の音響現象を見る音楽学等、ニコラの多岐的な論理座標とともにヴィニヤイが例示したアプローチ法に関する議論は、JSSA にとっても示唆的であると思われる。

4. 著者プロフィール

水野 みか子 (Mikako MIZUNO)

作曲と音楽学の分野で活動。近年の作品は ISEA、ISCM、アルバ国際音楽祭、ヴェネチア国際音楽祭、北京 Musicacoustica、ACMP、Unyazi、TEM、ローマ実験音楽祭、などで上演されている。08年より EMS 及び同アジアネットワーク EMSAN において連続的に電子音響音楽の研究成果を発表。2011、2012、2013年には、北京、カルガリー、名古屋、東京、台北、桃園を結ぶネットワークコンサートを実施した。